

## 映評

嵐 莉菜・出演／川和田恵真 監督・脚本

## 『マイスマールランド』

バンダイナムコフィルムワークス / 2022年12月発売 / 1時間54分 / 4,180円  
ASIN B0BD6GFGS7評者：浮網 佳苗  
同志社女子大学 表象文化学部

日本における難民認定率は、2023年時点でわずか3.8%と極めて低水準にとどまっている。これは、同年におけるアメリカ、イギリス、カナダなどの先進諸国の認定率（およそ60%）と比べても、その異常な低さが際立っている<sup>1)</sup>。このような状況で、私たちは、難民としてこの国にやってきた人々とその家族について、どれほど理解しているだろうか。昨今、SNSを中心に、外国にルーツを持つ人々や、難民の受け入れに反対する声が目立つようになってきた。そうした発言の多くには、心ない言葉が並び、時にヘイトスピーチとすらいえる内容を含む。しかし、こうした言説の背景には、難民として日本に暮らす人々の動機、生活、そして思いに対する無理解が横たわっているのではないだろうか。

映画『マイスマールランド』は、私たちの無関心や無理解に対して一石を投じる作品である。この映画は、難民として日本に暮らすクルド人一家の生活を通して、彼らが日常のなかでどのような困難に直面しているのかを丁寧に描き出す。製作には、『万引き家族』などの良質な社会派ドラマで知られる映画監督、是枝裕和も名前を連ねる。

物語の中心となるのは、埼玉県川口市で暮らす父親と3人の子どもからなるクルド人の家族である。長女のサーリャは地元の高校に通う、どこにでもいる日本の高校生と変わらぬ日常を送っている。ただ一つ違うのは、彼女がクルド人であることを周囲に隠している点だ。友人と

のおしゃべり、アルバイト、大学受験の準備――そんな普通の生活は、家族の難民申請が却下され、在留資格が失効してから一変する。仮放免の身となった一家は、労働を禁じられ、正当な理由がなければ県外に出ることすらできないという、極めて不自由な生活を強いられる。父親は、娘の進学を何としても叶えたいとの思いから、違法であるを知りつつも労働を続けていたが、ついに警察に発見され、出入国在留管理庁（入管）の施設に収容されてしまう。子どもたちは、ガラス越しのわずかな時間しか父と会うことができず、その様子はまるで拘置所や刑務所にいるかのようである。



難民申請の却下が伝えられ、在留資格証の無効化手続きが行われている場面  
(ウェブメディア CINRA ホームページより [https://www.cinra.net/article/202205-mysmallland\\_iktaycl](https://www.cinra.net/article/202205-mysmallland_iktaycl))

父親不在のなか、サーリャは幼い弟妹を支えながら、生活費の工面に奔走する。仮放免の立場であるがゆえにアルバイトを解雇され、収入が途絶え、家賃すら払えないほどの困窮に追い込まれる。やがて、彼女は「パパ活」にまで手を出してしまう。もちろん、支援を申し出るク

ルド人仲間や日本人の知人はいるが、「大丈夫」と嘘をつき、心配をかけまいとする姿には、見る者の胸を締めつけるものがある。

描かれているのは、特別な何かではなく、誰もが慣れたごく普通の「日常」だ。家族での食事、学校生活、進学への思い——それらは日本人の生活と何ら変わらない。しかし、「クルド人であり、難民申請をしている」という一点だけで、日常はたやすく奪われ、苦悩に満ちた現実が押し寄せる。そのことを、本作は静かに、しかし強く突きつけてくる。

とりわけ印象に残るのは、難民申請の却下を伝える入管職員の機械的な対応である。祖国でいかに命の危険があったかを必死に訴える父親を尻目に、却下された理由を伝えることもなく、画一化された役所的手続きを淡々とする姿は、目の前にいる人間と向き合っていないことを象徴しており、この一家が置かれた八方塞がりの状況を、よりいっそう際立たせている。

ただ普通に暮らしたいだけなのに、それを阻む制度の壁——この現実を目の当たりにするのは、非常に辛い体験である。「制度さえ整えば、この家族はもっと安定した生活を送れるのではないか」という思いと同時に、そうした制度を支持し、維持してきたのが、私たち有権者自身であるという事実も突きつけられる。難民認定率の低さや、入管行政の課題は、もちろん政府の政策によるものではあるが、その背景には、難民受け入れに慎重な国民感情があることも否めない。つまりこれは、日本社会全体が共有してきた価値観や選択の結果でもあるのだ。

そう考えると、日本に暮らす多くの人々は、自らの安全が保障された環境の中で、難民の受け入れに懐疑的な姿勢をとっていることになる。一方で、故郷を離れざるを得なかった難民たちは、認定が下りなければ日本でも不安定な立場に置かれ、帰る場所も持たず、居場所のない生活を余儀なくされる。両者の立場はあまりにも異なり、難民の方が圧倒的に弱い状況に置

かれているにもかかわらず、「難民を受け入れたら日本人の生活に支障が出る」「認定されなければ出て行くべきだ」といった主張が一方的になされるのは、人権の視点に欠けた排他的な言説であると言わざるを得ない。また、難民認定が却下されたからといって、直ちに「祖国に帰れ」と言うことが、現実的にも倫理的にもどれほど困難なことかを、私たちは想像できているだろうか。彼らには家族があり、日本で生まれ育ち、地域に根差して生活してきた子どももいる。映画の中でも、サーリヤはトルコ語を父親はクルド語も話すが、妹と弟は日本語しか話すことができない。このような状況下で、単に「不法滞在だから帰国せよ」という対応は、当事者の生活実態を無視した、非人道的なものに映る。

映画の終盤、収容された父親がある大きな決断を下す。その選択は、今の日本における難民受け入れ政策の限界や問題点を象徴するものであると同時に、父親として家族を思う気持ちが強く表れており、観る者に深い余韻を残す。ぜひその結末を、実際に映画を通して見届けたい。

本作は、終始重く、胸を締めつけられるような雰囲気にも包まれている。しかし同時に、映画とは単なる娯楽にとどまらず、私たちの感情や価値観を揺さぶり、社会のあり方について問い直す力を持つものであるということを、改めて感じさせられる作品でもある。難民というテーマに対してどのような立場にある人であっても、まずは現実を知るための第一歩として、この映画を観ることをすすめたい。そこから、少しずつ社会のあり方について考えを深めていくことにつながるのではないだろうか。

#### 注

- 1) 「日本の難民認定はなぜ少ないか？——制度面の課題から」NPO 法人難民支援協会、[https://www.refugee.or.jp/refugee/japan\\_recog/](https://www.refugee.or.jp/refugee/japan_recog/) (最終閲覧日 2025/05/10)